

平成 21 年 5 月 26 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007 年度～2008 年度
 課題番号：19520243
 研究課題名（和文） 1910 年から 1960 年までのドイツ語圏の社会文化的ディスカールの研究
 研究課題名（英文） Studies on the socio-cultural discourses in the German speaking areas between 1910 and 1960.

研究代表者
 福本 義憲 (FUKUMOTO YOSHINORI)
 首都大学東京・大学院人文科学研究科・教授
 研究者番号：90111351

研究成果の概要：ドイツ語圏における第一次大戦期から第二次大戦後にいたる社会文化的なディスカールの形成と再生産のプロセスを解明するために、研究実施計画に示された枠組みにしたがって、福本、古屋、黒子は社会文化的ディスカールの形成における「認知的・道具的合理性」および「道徳的・実践的合理性」レベルについての理論的・個別的研究に従事し、中居、園田は「美的・実践的合理性」レベルでの諸現象の研究を行った。研究素材は、1910 年から 1960 年までのほぼ 50 年間の、ドイツ語圏の各種メディア（新聞・雑誌・文学を含む文字メディア、さらに演劇・歌謡・美術などの芸術メディア、映画・ラジオ・TV などの技術メディア）に広く渉猟し、その中で上記の理論的枠組みに照らして重要でありかつ時代と地域の特徴をよく表していると思われるものを取り上げて、各人が詳しく分析を試みた。福本は、社会文化的事象のディスカール分析の理論的考察（「テキスト・ディスカール・ディスカール分析」）を行うとともに、第一次大戦前後の権力(Macht)をめぐるディスカールの形成と再生産の過程を解明するため、特にチューリッヒ・ダダの反市民的ディスカールの特徴を体現しているヴァルター・ゼルナーを取り上げ具体的に詳しく論じた。中居はウィーンのリートの特徴分析を行い、民衆歌謡における社会文化的ディスカールの形成とその再生産の事情を明らかにした。園田は劇作家カール・ツックマイヤーの『ケーペニクの大尉』を取り上げ、「制服」のディスカール装置を第二帝政期ヴィルヘルム二世統治下のベルリンの時代と地域性と照らし合わせて詳しく論じた。黒子は、メディア現象のエコノミー、自然科学の文化主義的理解、技術的装置と言語の関係などについて、ハーバーマス＝スローターダイク論争に即して論じた。その際、黒子は、20 世紀の科学技術およびそれをめぐるディスカールを、ローマ時代に淵源を持つフマニスムにつながる問題として問い直すとともに、このフマニスムの問いを発展させ、ゲーテに始まる「世界文学」ディスカールのもつ社会・経済・文化史的な射程を、マルクス、プレヒトにおける再編成を通して究明した。古屋は、ベンヤミンのメディア概念の現代的射程をめぐって考察するとともに、マルクス・バウアー『伝達のただ中—ヴァルター・ベンヤミンのメディア概念—』翻訳と注解を行うことで、ベンヤミン研究に貢献を果たした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：独文学、ディスクルス、文化史、メディア、合理化、スローターダイク、ハーバーマス、ワイマール期、ウィーン民衆音楽、ツックマイアー

1. 研究開始当初の背景

研究代表者である福本は、かねてより現代言語学に見られる2つの潮流、すなわち、文法構造の各レベルに一定の自律性を前提としてその規則性を探求する構造主義的言語研究と、発話状況・日常知識・発話意図など文法のコンテキスト依存性に着目する言語研究を対比し、その相互補完的な観点に立脚し、言語能力と言語活動の全体像を捉えようとする研究を行ってきた。

以上のような研究を通じて痛感されたのは、言葉の「意味」はやはり広範な歴史的・社会的・日常的コンテキストの中に醸成されるというまぎれもない事実であった。そこで今回の研究は、従来の二つの研究を発展解消して、歴史・社会・日常のなかで醸成される言葉の「意味」作用に焦点を絞り、われわれ人間の言語能力・言語活動の核心部分に迫ろうと考えた。そのためにはいわゆる狭義の言語学から抜け出て、文学研究、社会学、文化学研究の知識と方法論と架橋を果たさねばならないと考え、文学・文化研究と言語学研究の両者を含む研究組織を立ち上げ、その両者に共通の研究の枠組みを以下に述べるように設定することで、本研究は出発した。

2. 研究の目的

日常言語の推論過程に影響を及ぼす社会文化的なディスクルスがどのようにして形成され、再生産されるのかを、文学研究、言語学、文化史、精神史、メディア史、メディア文化論、社会的ディスクルス論、トポス論、公共的言語使用、公共性の議論などに幅広く貢献する観点・方法論から、解明することが研究の目的とされた。

3. 研究の方法

ハーバーマスがマックス・ウェーバーから批判的に受け継いだ世界関係的認識論構造を出発点としながら、そこから抜け落ちていく領域を「認知的・道具的合理性」、「道徳的・実践的合理性」、「美的・実践的合理性」と捉えて、その領域で展開されるディスクルスの生成と発展、変容と再生産を、社会文化的な合意形成の場であると同時に具体的な歴史的転成の場として分析することを目指した。1910年から1960年までのほぼ50年間に

けるドイツ語圏の各種メディアに登場する典型的なディスクルスをとりあげ、それが日常の談話世界、個々人の意見形成・イメージ形成にどのように影響を与えたか、また日常世界からのフィードバックによって、そのディスクルスはいかに変容し、また再生産されたか、その結果、公共圏の議論や政策決定がいかなる様相を呈することになったかについて解明するため、個別的研究を積み重ねた。

4. 研究成果

研究報告集にまとめられているように、福本は社会文化的な事象のディスクルス分析の理論的考察（「テキスト・ディスクルス・ディスクルス分析」）を行うとともに、第一次大戦前後の権力(Macht)をめぐるディスクルス、「ダダ宣言」における反市民的ディスクルスの形成と再生産の過程を解明した。中居はウィーンの民衆歌謡における社会文化的ディスクルスの形成とその再生産の事情を明らかにした。園田はヴィルヘルム期のベルリン・ケーペニクにおいて起こった「ケーペニク事件」をとりあげ〈制服〉をめぐる社会的ディスクルスの形成と20年代における再生産のプロセスを解明した。黒子は、メディアのエコノミー、自然科学の文化主義的理解、技術的装置と言語の関係などについて、ハーバーマス＝スローターダイク論争に即して論じた。その際、黒子は、20世紀の科学技術およびそれをめぐるディスクルスをローマ時代に淵源を持つフマニスムスにつながる問題として問い直すとともに、このフマニスムスの問いを発展させ、ゲーテに始まる「世界文学」ディスクルスのもつ社会・経済・文化史的な射程を、マルクス、プレヒトにおける再編成を通して究明した。古屋は、ベンヤミンのメディア概念をめぐって考察するとともに、マルクス・バウアー『伝達のただ中—ヴァルター・ベンヤミンのメディア概念—』翻訳と注解を行うことで、ベンヤミン研究に貢献を果たした。これらの個別研究を通じて、1910年から1960年までのほぼ50年間のドイツ語圏のディスクルス分析を基にした、知の個別具体性と総体性を同時に視野に納めた文化記述理論の基礎的研究が終了し、今後の文化理論展開および他の時代のディスクルス分析への指針が得られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ①福本 義憲 プロジェクト・クールネス
—ヴァルター・ゼルナーの新即
物的『聖務日課書』—
科学研究費補助金 基盤研究
(C)「1910年から1960年まで
のドイツ語圏の社会文化的デ
ィスクルスの研究」課題番号：
19520243 研究代表者 福本義
憲 研究期間：平成19年度～
20年度 研究成果報告書
No.2, 101-111, 2009 査読無
- ②福本 義憲 ダダイスト・ゼルナー博士の
(弛緩)『人文学報』No.419,
103-118, 2009 査読無
- ③園田みどり 『ケーペニクの大尉』—制
服、時代のアトリビュート—
『人文学報』 No.419, 33-77,
2009 査読無
- ④黒子 康弘 波にさらわれた歴史意識—
ゲーテの概念「世界文学」の考
察—
『人文学報』 No.419, 79-102,
2009 査読無
- ⑤福本 義憲 オットー・ゾイカの初期幻想
小説における Macht の諸相
『METROPOLE』 No.30,
27-48, 2008 査読無
- ⑥福本 義憲 テクスト・ディスクルス・デ
ィスクルス分析 『人文学報』
No.405, 93-112, 2008 査読無
- ⑦中居 実 「ウィーンの唄」管見—「ウ
ィーンの唄」研究序説—
科学研究費補助金 基盤研究

(C)「1910年から1960年まで
のドイツ語圏の社会文化的デ
ィスクルスの研究」 課題番
号：19520243 研究代表者 福
本義憲 研究期間：平成19年
度～20年度 研究成果報告書
No.1, 1-27, 2008 査読無

- ⑧黒子 康弘 Was heißt Realismus in der
Dichtung? Goethes Begriff
"Weltliteratur" in neuer Sicht.
Internationale Ausgabe von
"DOITSU BUNGAKU"
Band 7 / Heft 1, (ドイツ文学
通巻137号)182-197, 2008 査
読有
- ⑨黒子 康弘 フマニスムスの罪と罰—
スローターダイクにおける書
字性の悪の根源—
ドイツ文学 Band 6 / Heft 4(通
巻136号), 157-178, 2008
査読有
- ⑩古屋 裕一 マルクス・バウアー『伝達の
ただ中—ヴァルター・ベンヤ
ミンのメディア概念—』翻訳と
注解
科学研究費補助金 基盤研究
(C)「1910年から1960年まで
のドイツ語圏の社会文化的デ
ィスクルスの研究」課題番号：
19520243 研究代表者 福本
義憲 研究期間：平成19年度
～20年度 研究成果報告書
No.2, 113-120, 2009 査読無
- [図書] (計 1 件)
- 福本 義憲 クラウン独和辞典・第4版(共
著) 2008, 三省堂, 総ページ

6. 研究組織

(1)研究代表者

福本 義憲(FUKUMOTO YOSHINORI)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：90111351

(2)研究分担者

園田 みどり(SONODA MIDORI)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：80246363

中居 実(NAKAI MINORU)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：80106591

古屋 裕一(HURUYA YUICHI)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：10229130

黒子 康弘(KUROGO YASUHIRO)

首都大学東京・人文科学研究科・助教

研究者番号：50305398

(3)連携研究者 なし